

2021/8/11-3

(中編からの続き)

(うと)〇世話し 疑う余地がないと思ってやっていた事が最悪の結果を招いてしまった?
後編) 書庫版



この話を前編のお話と重ね合わせてみると

「産業革命はそれ以降の人類の永遠の成長と幸福への扉を開いたかに見えたが、200年近く経った今から見るに、産業革命はその思いとは全く正反対の方向、ひょっとしたら人類滅亡への第一歩を踏み出した日だった」

という仮説も成り立ちそうな気がします。

即ち産業革命は、それまで眠っていた人類の「未曾有得の欲望」に「成長」という名で「これは善なり」というお墨付きを与えて火を付けた。

しかしその美名に隠された「むき出しの欲望」がエネルギーの過度な消費を産み、いつしかその欲望と過度なエネルギー消費をコントロールできなくなって人類存立の礎である環境そのものをも破壊するまでになり、それを止めようにも止まらなくなってしまっている。

「おかしいとは気づいてはいるが、多勢に無勢。大勢の流れに逆らってまで、自ら進んで止めることは難しい」

「成長をやめろというのか。経済に下押し圧力を加える様な事をしろというのか。安全で快

適な生活を求めることの何処がいけないと言っただ。えっ、言ってみろ、おまえに」

しかしそれでも困ります。それでも言うしかありません。また、そこで引き下がって実際に「我々が生きていく上での共通コミュニケーションフィールド（語学的に言えば例えば英語）や共通土台（プラットフォームプラネット）」を失っては大変です。

ですので、此処が一番、後代をも担う視点に立った第二の、いやその後代に立った人類のこれからの長い歴史から見れば「こちらが本家で真性の産業革命」といわれるような、

「200年前の産業革命もどきは、この本家、真性の産業革命を生む為のイントロにすぎなかった」

と言われるような、

換言すれば、今コロナ禍を機に、全く新しい概念を常態化させる、それこそ「ニューノーマル（新常态）」が必要になっていっているのではないのでしょうか

なので、そのニューノーマル（新常态）を見いだし設立するまでの間、時間稼ぎではあるかもしれませんが各個人一人一人が声を上げ、何はさておき第一優先で一刻も早く

その各個人自らが

「温暖化対策を即断実行すべき」

だと考えております。